

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(2 8)

中村周平

前回に引き続き、今回も車いすアメフトに関わるエピソードを書かせていただきます。

私と Alex との共通点、それはお互いがマイノリティな存在であるということでした。「マイノリティ」とは、社会における少数派を指す言葉として使われています。

つまり、私は障害者、Alex は外国人という社会的少数派ということになります。そして、前回の号で書かせていただいた、街中で凝視されることや、街頭での配布物をもらえないことなどは、このマイノリティであるがために、しばしば生じることだと考えます。

ここからは、私や Alex の私見ですが、このようなことが生じる背景には、マイノリティの対義語であるマジョリティな存在、つまり、社会における多数派である方々と、少数派である障害者や外国人との接点の少なさが理由としてあると思っています。多数派の方々が育っていく環境や教育、労働の場において、少数派の方々と出会う機会が決して多くはない（少なくとも自分たちの周りにおける）現状で

は、相手が物珍しく見えたり、相手に対して間違った理解をしてしまうことは、可能性として十分に考えられることです。「障害者あるある」と、「外国人あるある」に似たものを感じたのも、お互いがマイノリティな存在であったからこそだと思います。

ただ、私が Alex と出会って気付かされたことは、私もまた人を見た目で判断してしまう、多数派の価値観を持つ一人であるということでした。

少し話はずれるかもしれませんが、私自身、この障害を負ったことで起きた自分への一番の変化は、自分とは違う人の目線で物事を捉えることの重要性を見い出せたことでした。障害を負ってからの経験や気づきは、障害を負う前の自分には絶対に理解できないことでした。何か問題が生じた時、今の自分の立場からだけではなく、違う立場の目線でも物事を把握し、複数の解決策を考えることを大切にしてきましたし、それが自分にとっての強みだと感じていました。しかし、Alex と出会ってから、同じ時間を共有する中で気付かされたことは、私も外国人に対してステレオタイプな価値観を持っており、知ら

ず知らずのうちに違う立場の方々を傷つけてきたという事実でした。

そのことに気付いたとき、自分がいかに頭でっかちな思考になっていたかということに恥ずかしさを覚えました。ただ、その反面、Alex といることで自身の知識の幅や、視野の大きさが広がることに、嬉しさを感じていました。

「自分の身近に、こんなにも知らないことがたくさんあり、それを日々体感することができる。」

一緒にいるだけで、日常の生活にはない刺激に、語弊があるかもしれませんが、心地よいものを感じていたのかもしれませんが。

かなりまわりくどい説明になってしまいましたが、車いすアメフトに度々参加してくださるリピーターの方の中には、この日常生活にはない刺激に感化された方も少なくないと感じています。車いすアメフトには、Alex の友人や、彼が所属するコミュニティから、毎回多国籍なメンバーが参加してくれています。また、障害のある方も、現役車いすバスケット選手から、自分だけでは移動困難な重度な方まで、様々な障害を持つ方が顔を揃えます。そこでは、これまで自分が遭った(?) ことのない「未知との遭遇」が生まれており、お互いに様々な刺激を受けながら、同じ時間を共有することができているように思えます。

この「日常生活にはない刺激」こそ、マイナースポーツにも関わらず、一定の参加者を期待できる一つの要因であると思います。